

## 職業翻訳教育と日本の大学（と少し日本語）

まったく厳密な調査ではありませんが「翻訳」として何を思い浮かべるかといういささか曖昧な質問を東京大学の主に日本人からなる学部学生さんにすると概ね8割以上が出版翻訳とりわけ文芸作品の翻訳を思い浮かべると答えます。川口篤さんがジイドを訳した印税で世田谷に家を建てたといったまことしやかな噂が2010年代の学生にも伝わっているわけではないのですが日本の市場規模で2000億円と推定される産業翻訳ではなくまた最近急速に拡大してきたボランティア翻訳でもさらにはGoogle Translateなどの機械翻訳でもなくせいぜい100億円程度と推定される出版翻訳の中でもさらに一部に過ぎない文芸翻訳が依然として（という言葉をここで使うためにはいくつかの前提が必要ですが）典型的な「翻訳」と見做されていることはそれなりに興味深いことです。

少し前のこちらはきちんとした調査になりますがそこでは日本の大学では翻訳教育を行っている場合でも職業翻訳者の教育ではなく教養教育の一環としてなされていることが多いことが示されており<sup>[1][2]</sup>翻訳に対する学生さんのイメージはちょうどそれに対応していると考えることができます。ところで英国やフランスやスイスやスペインといった欧州の国々でもオーストラリアでも北米でもそして最近では中国<sup>[3]</sup>や韓国<sup>[4]</sup>でも職業翻訳者養成を目的とした大学院のコースが翻訳教育の標準となっていることを考えると日本の大学における翻訳教育の状況はほぼ同等の高等教育がなされている他の国々と

比べてかなり異質であることがわかります。

もちろんどちらが良いという評価は視点にもよりますから一概には言えません。けれども最近盛んになってきたボランティア翻訳やファンサブやクラウド翻訳、MT+PE（機械翻訳+人手による事後編集）などと人間による付加価値としての翻訳とを差異化して翻訳産業における翻訳の品質を維持する明示的な基準を導入しようという動きが2006年の欧州翻訳サービス規格の発効<sup>[5]</sup>などを経てまもなくISOの認証規格になる見込みであること<sup>[6]</sup>そしてその中で要求される翻訳者の資格の一つに大学における翻訳の学位が挙げられていることから<sup>[7]</sup>日本の翻訳産業としては大学に職業翻訳者を養成するコースがなく翻訳あるいは翻訳学の学位を出していない現在の状況が続くならば将来的に競争力を失っていくことに繋がるという危惧が生じることは当然です（とはいえその危機感は翻訳産業の一部にとどまっているのですが）。ちなみに例えば欧州共同体や国際刑事裁判所や世界知的所有権機関といった組織の国際入札ではISOの認証を得ていなければ入札資格なしとなるかも知れません。

そのようなわけで日本の大学でも職業翻訳者養成コースの設置が求められる社会的な状況はあまり知られてはいないものかなり強く存在しています。もちろん大学側でそのような現実的な状況にすぐに対応する必要は必ずしもありませんし今やほとんど顧みられなくなった大学の歴史的使命などというものを考えるならば社

会のその都度の短期的な動きに何でも合わせるのがよいわけではないという考えも当然それなりの説得性をもつものではあります。とはいえ実際のところ近年翻訳通訳コースを設ける大学は増加傾向にありそれは文学語学では学生を集められなくなったためという要因もあるようでそうするとそこでは教養教育と言うよりも実践的な言語技術教育というかたちで翻訳通訳コースのミッションが定義されることになることが当然予測されますので好むか好まざるかに関わらず大学側の事情としてもむしろ職業翻訳者養成コースに対する社会的養成への対応を促す要因は存在しているわけです。

しかしながらこれまで教養教育の一部として行われていた翻訳教育を職業翻訳者教育に切り替えることはそれほど簡単ではありません。例えば英国の大学では1960年代に文学中心の言語教育に対する見直しが行われ応用言語学的な側面も考慮した言語技術教育カリキュラムが導入されてきた中で1990年代に大学院レベルで職業翻訳者養成を行う翻訳コースが導入された経緯があります。そうした基盤の薄い日本の大学では最悪の場合職業翻訳者養成コースの形骸化が進むことも考えられます。仮にISO規格に準ずる資格を職業翻訳コースが出している場合それはまた翻訳産業に逆流し日本におけるISO認証が実質的な品質維持の基準としての意味を失うことにもつながりかねません。

それに対してそれは日本の翻訳産業にとってはとても困るだろうがそれと大学の位置づけとはもちろん職業翻訳者教育コースを設置した限りにおいては関係があるが大学そのものの位置づけはそもそもそういうものではなかったはず

なのだから大学総体あるいは大学の理念にとってはそれほど関係がないのではないかと考えることも可能かもしれません。それは本当でしょうか。19世紀後半に文学が現代日本語を形成するのに重要な役割を果たしたことは知られていますがそれなりの姿を整えて一旦成立した一つの（というのが何を指すかは曖昧ですが）言語の維持や展開がどこまで文学に依存するのかはそれほど明確ではありません（ここでは翻訳について語っているのか文学について語っているのか多少乱暴ですが）。かな漢字変換による日本語入力技術が仮に誰もが使えるようなかたちで発展していない中でインターネットが一般に広まっていたとしたら世界的な言語表現の流通の中で日本語の地位はどのようになっていたかというだけでなく一つのそれなりに広まり翻訳を介して他言語との関係を維持している言語の場合いずれにせよ世界的な言語流通の中で自らの姿を整えざるを得ない状況にあることに照らして日本語の姿そのものがどうなっていたかを想像するならば近代以降現在まで引き継がれてきた日本語のそれなりの姿がそれなりに維持されたのは本当にぎりぎりの状況においてであったと評価することができます。それと同様の大きな変容をもたらしうるかもしれない他言語との交流に関する外的条件をめぐるフロンティアは推定100億円程度と考えられる出版翻訳のさらに一部である文芸文学翻訳にではなく国内市場だけで約2000億の規模にある日本語を一方の言語とする産業翻訳やそれと競合する翻訳の領域にあるのかもしれないと考えることは少なくとも言語流通の現状を考えまた広辞苑に掲載されたと騒がれる新語がどこから来たか

を考えるならばさほど妥当性を欠くものではないでしょう。とすると職業翻訳者養成をめぐる大学の対応は短期的な社会の要請に反応するという側面を持ちつつも日本語という言葉が現在置かれている状況と日本語というものの存在を

めぐる考察へと私たちを導くものでもありそれは大学において考えられるにふさわしいテーマであることとなります。

### 謝辞

本稿をまとめるにあたり、リーズ大学翻訳研究所元所長アンソニー・ハートレー名誉教授（現東京外国語大学特任）、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科武田珂代子教授、神戸女学院大学英文学科田辺希久子教授、（株）翻訳センター河野弘毅氏との議論を参考にしています。ここに記して謝意を表します。

### 註

- [1] 染谷泰正 (2010) 「大学における翻訳教育の位置づけとその目標」『外国語教育研究』第3号, 73-102.
- [2] 長沼美香子 (2008) 「アンケートにみる日本の大学翻訳教育の現状—翻訳教育実態調査の集計と分析—」『通訳翻訳研究』8号, 285-297.
- [3] 仲伟合 (2014) 「中国における翻訳通訳教育」『JTFジャーナル』（Web版）No. 274, <http://journal.jtf.jp/special/id=383>
- [4] 吉英淑 (2014) 「韓国における翻訳教育事情」『JTFジャーナル』（Web版）No. 274, <http://journal.jtf.jp/special/id=385>
- [5] CEN (2006) *EN 15038: European Quality Standard for Translation Services*. European Committee for Standardization.
- [6] 田嶋奈々 (2014) 「翻訳サービス規格ISO 17100の紹介」『JTFジャーナル』No. 274, p. 6.
- [7] 翻訳者に関するその他の資格は、5年以上の実務経験と、翻訳以外の学位+2年以上の実務経験、の二つ。



影浦 峽 (かげうら きょう)

[生年月日] 1964年3月26日生

[出身大学又は最終学歴] 東京大学・大学院教育学研究科、PhD

[専門領域] 専門は言語とメディア

[関心領域及び主たる著書・論文]

最近では産業翻訳の観点からの翻訳と言語の関係に関心を持ち、ISO 17100に対応した翻訳教育システム「みんなの翻訳実習」(<https://edu.ecom.trans-aid.jp/>)を情報通信研究機構及びリーズ大学翻訳研究所と共同で開発している。著書に『信頼の条件』(岩波科学ライブラリー, 2013)、*The Quantitative Analysis of the Dynamics and Structure of Terminologies* (John Benjamins, 2012)、『3.11後の放射能「安全」報道を読み解く』(現代企画室, 2011)等がある。現在は東京大学大学院情報学環(流動)／教育学研究科所属。*Terminology*誌及びモノグラフシリーズ *Terminology and Lexicography Research and Practice*の編集委員。